

家近良樹編『もうひとつの明治維新——幕末史の再検討——』

毛利 敏彦

はじめに

本書は、幕末政治史を対象にした論稿八編で編まれた論文集である。編者による巻頭の「序 幕末維新史の再構成にむけて」は、「1 本書編纂の意図」と「2 本書の構成と論稿の要旨」からなり、1では「いままで黙殺されてきた政治勢力を視野に入れて、幕末期の政治状況を検討し直」して、「幕末政治史を再構築」するのが「本書の狙い」であるとの野心的にして魅力的な抱負が述べられている。2では各論稿の要旨や意義がそれぞれ一編について一頁程度で紹介されているが、そこから判明するように、各論稿

は、「黙殺されてきた政治勢力を視野に」云々という大まかな了解を共有するとはいえず、その大枠内で各自の問題意識に沿って作成されているから、本書を緊密に統一された著作として一度にまとめて批評するのは技術的にも難しい。そこで各論稿を個別に検討する。

一 家近良樹「長州藩正義派史観の根源

天保改革期の藩内勢力と政治力学」

本稿は、長州藩明治維新史において、「どうして…正義派対俗論派の対立の図式がそもそも描かれるようになったのか。そのルーツを長州藩の天保改革の中を探ろうとする

もの」である。

そこで正義派史観のルーツとみなされる天保改革の具体的な経緯の検討に移り、在来説の欠陥を、(一)幕府天保改革と連動した側面が見落とされてきた、(二)村田清風の役割を過大視してきた、と指摘するが、的確な批判の視点であろう。その上で、改革の始期、段階、終期を設定して天保改革像の見直しを試みている。そして、弘化三年以降の一連の「改革をリードしたのが、宍戸丹後(房寛)―坪井九右衛門ラインであった。つまり、坪井は、後年、正義派から盛んに攻撃を受けたような改革阻止派では決して無かったのである」と結論しているが、説得的である。

ただし、このままで本稿を閉じているのは物足りない。坪井らが消極的には「……で無かった」のはよく分かるが、では積極的には「……であった」のか、筆者の見解を聞きたいところである。さらに、「序」の問題提起に照らし合わせれば、ここでせっかく探り出された新しい天保改革像が以後の長州藩史の理解に関わり、ひいては幕末政治史の「再構築」にいかに関連するののかという展望が、たとえ仮説的にでも提示されてよかったのではなからうか。

二 藤田英昭「文久二・三年の尾張藩と中央政局

徳川慶勝・茂徳「二頭体制下の尾張藩の政治動向」

本稿は、「文久二年後半に(前藩主徳川)慶勝が藩政に復帰した時期から、翌年九月の(藩主徳川)茂徳の退隠までの、慶勝・茂徳の二頭体制下にあった尾張藩の動向を朝廷・幕府双方の動向と関連させて検討」したもので、事実経過が手際よく整理されている。

ところで、明治維新史における尾張藩といえ、徳川御三家であるにもかかわらず王政復古クーデターに軍事参加したという特異な行動が注目され、したがってその理由と背景の解明は、当該期尾張藩研究にとって重要な課題となるはずだが、本稿からは、そこへの展望が必ずしも開かれていないようである。その布石のためにも、単なる事実経過の説明の域にとどまらず、雄藩一般とは異なる御三家としての特性が、慶勝や茂徳の行為をいかに規定し、そのことが幕末政局にいかに関影したかという問題意識をあらためて磨く必要がある。

三 友田昌宏「文久三年京都政局と

米沢藩の動向」

本稿は、これまで手薄だった東国諸藩研究の一つとして、「文久三年の二月から九月まで藩主上杉斉憲が京都に留まり、幕末政局において一定の役割を果たしたことから、その後も幕府・長州の双方よりその動向を注視されたという理由」で米沢藩の動向を検討したもので、前掲藤田稿と同様に事実経過が手堅く整理されている。

一読すれば、米沢藩が表面では各方面からもてものように見えながら、その実はまさに「飛んで火にいる夏の虫」で、初心な田舎藩が情勢に翻弄された実態が期せずして焙りだされているのは興味深い。その側面をもっと対自的に把握してもいいのではなからうか。また、数箇所藩財政難に言及されているが、同藩の動きを規定する要因としてより踏み込んだ具体的説明が望まれる。

四 仙波ひとみ「幕末朝廷における近臣

その政治的活躍のメカニズム」

本稿は、「幕末の朝廷に対する基本的政治解釈の一つ、

朝廷内「上層」対「中下層」といった観点について、より実態に即した形での見直しを行おうとするもの」である。

そして「朝議のメカニズムと朝廷社会における近臣の位置、機能」にとくに注目するという。

議論は制度から実態にまで多岐にわたっているが、整理すれば論旨の基本は簡明であり、要するに、朝廷の仕組みにおいては、撰家を除く全堂上が多数の「遠臣」と少数の「近臣」とに分かれていて、近臣は遠臣のなから天皇によって縁故で選抜され、近臣だけに朝議に参加できる資格ないし可能性が認められていた、という実態の説明に尽きる。家格の低い岩倉具視が活躍できたのは、かれが近臣に採用されたからだったという。本稿は、朝廷のあり方を理解するのに必須であるにもかかわらず、意外にも見過ごされがちだった基本的知識を改めて提示したという意味で、いわば「コロンブスの卵」的な仕事として有益であろう。

さらに候所（詰所）の位置が天皇・廷臣間の親疎と密接に関わっていたことなど、朝廷内部の生態にまで筆が及んでいて興味深い。

五 笹部昌利「京よりの政治情報と藩是決定

幕末期鳥取藩池田家の情報収集システム」

本稿は、「『政治都市』幕末京都において展開される大名家の政治運動において欠くべからざる分子である京都留守居」の実態と機能を説明する一助として、「鳥取藩池田家の京都屋敷を中心とした京坂地域に所在する大名家諸機関についての基礎的考察」と「そこから発せられる政治情報が大名家の政治意思決定にどれほどの規定性を有したか」を論じたものである。

まず、閑職だった京都留守居が京都政情の重要化とともに「非常の劇職」に転じた経緯が説明される。次に文久二・三年に有力諸侯が上京して公武周旋を競った状況に鳥取藩も参入したが、藩主池田慶徳にとつては必ずしも意に合わず、以後は国元に腰を据えて全国政局から距離を置き、京都留守居からの情報に拠って藩の行動方針を決めるにいたった実情が概述されるが、「京坂書通写」に示された情報内容と藩の対応との照合が主題であり、これまで閑却されてきた京都留守居の役割や働きへの着眼は面白い。

六 久住真也「長州再征の目的

慶応二年六月開戦前後の徳川幕府」

本稿は、長州再征には、表面的な目的である長州処分の実行に加えて、「秘められた遠大な目的」すなわち徳川「郡県制」国家樹立構想があった、という説の当否をあらためて検討したものである。

手がかりは老中板倉勝静から同僚老中小笠原長行に宛てた書簡で、筆者の考証では「信憑性の高い」ものである。同書簡を読解した結果、「秘められた遠大な目的」は、空想的な願望としてはあり得ても、幕府中枢部における幕勢衰退の自覚からみて現実性はなかった旨が論証されているが、妥当な見解であろう。対象をめぐる主観的客観的諸条件を総合的に勘案すれば常識的に帰納できるのであろう結論を、念のために実証的に再確認した趣の仕事といえよう。

七 白石烈「將軍空位期における

『政令一途』体制構築問題と諸侯会議」

本稿は、「『政令一途』という概念をキーワードに、將軍空位期における新国是制定のための諸侯会議を事例にして

有力大名勢力等が如何なる『政令一途』体制構築を目指し、政局にどのような影響を与えたかを明らかにしようとしたものである。ちなみに、「政令一途」とは、幕末期の朝幕関係悪化に対応して武士層に生まれた国家意思決定主体の一元化要求を指すようであり、「幕末の政争とは、詰まるどころこの『政令一途』をめぐる動向」だとまでいう。

そのような観点から、当該期京都政局における諸勢力間の角逐過程をとくに肥後藩の視角から手際よく整理しているが、真の「政令一途」体制構築↓諸侯会議が指向されたものの、会議での意見の「一本化は可能なのか」という難題が解決されずに行き詰った、という中途半端な結論のまま論述を終えているのは物足りない。結局のところ、この主題の解明には、そもそも封建領主権（個別領有権）を残したままで「政令一途」は実現可能なのかという根本的理論問題への踏み込みが不可欠ではなからうか。

八 高橋裕文「武力倒幕方針をめぐる薩摩藩内反対派の動向」

本稿は、四侯会議の失敗後に薩摩藩論をリードするにいたった武力倒幕論に対して、藩内では強力な反対の動きが

脈々として存在し、それが同藩の動向を複雑に屈折させて政局をも左右した経緯を系統的に追跡したもので、論述が明晰で、本書の編纂意図に正面から応えた好論文である。

ただし、武力倒幕方針に対する反対の論拠は、何よりも冒険的な拳兵が失敗すれば島津家の存立自体が脅かされることへの危惧だったのはいうまでもないが、それに加えて、「無駄な出費が多く、藩庫が空になり、非常の蓄えもなくなり、……心ある人は嘆いている」（二四〇頁）という藩財政の現状への危機感が藩政実務者層に根強かった事情も軽視してはなるまい（前述の友田論文へのコメントでも触れたが、総じて本書所収の各論稿において政治をうごかす重要ファクターとしての財政問題への関心が希薄な傾向がみられるのは如何なるものであろうか）。また、武力倒幕派が適当に敬遠しながらも決定的な場面では頼らざるを得なかったキーパーソンとしての島津久光の位置づけも課題となろう。

結論として、武力倒幕反対論は、「武力倒幕のストレートな展開を食い止め、大政奉還論や公議政体論に相乗りしなければ運動を継続できなくさせた。結果的には、武力倒幕派は政略により新天皇を確保し、軍事的な勝利をおさめたが、反対派の唱えた問題提起は新政権成立後にも国民的

課題として新たな運動に引き継がれてゆくことになった」と締めくくっているが、主題の意義と展望を簡潔ながら的確に提示している。

むすびに

明治維新史見直しの大前提として、これまで無視ないし軽視されてきた政治勢力に照明をあてようというのが、本書のさしあたりの狙いであろうが、その場合にまず期待されるのは、何はともあれ史実の広範な発掘、つまり既成觀念に囚われずに、また通説類にも振り回されることなく、広く史実を再現し確認することであろう。その意味で、実証に徹した各論稿の姿勢には好感を持てる。貴重な素材提供の試みであるから、地道な事例蓄積への精進を望みたい。その営みの延長線上に自ずから道が開けてくるであろう。

家近良樹編『もうひとつの明治維新―幕末史の再検討―』
(有志舎、二〇〇六年一〇月刊、A5判、二六二頁、本体価格
五、〇〇〇円)

(もうり としひこ・大阪市立大学名誉教授)